

『祝！トマス杯優勝・ユーバー杯準優勝』

日本教職員バドミントン連盟

副会長 稲石 一雄



この度の快挙、誠におめでとうございます。6月8日に味の素ナショナルトレーニングセンターで祝勝会が催されました。その席に参列していたかつてのトマス杯・ユーバー杯の代表メンバーが壇上に招かれ、その壮観なことに感動を覚えたものです。その中に杉田博先生・中山紀子先生・天野博江先生のお姿がありました。

実はトマス杯・ユーバー杯は本連盟とも深い関わりがあります。まず、ユーバー杯についてですが、第5回大会つまり日本の初防衛戦の監督が本連盟発足に大いに関与された今井先先生なのです。そしてその時の中心選手が高木紀子先生（現中山）であり、天野博江先生です。お二人は教職員大会で数度の優勝を飾り、その後、日本協会の理事にもなられています。また中山先生は今回の東京オリンピック誘致にも大いに貢献されました。

トマス杯では、男子は1954年の第3回大会から参加をしています。このときの代表メンバーに神奈川県の杉田博先生が選ばれています。いまなお現役で教職員大会に52回連続出場をされています。

そのほかに教職員大会出場経験者の中でト杯・ユ杯の監督・コーチとなった方に伊藤基記（熊本県）・毛利清志（岡山県）・遠井稔男（栃木県）・今井勇司（群馬県）・小島一夫（茨城県）・藤原和文（香川県）各先生がいます。選手としては長谷川博幸（埼玉県）・井上哲章（熊本）・木船栄士（福井）・林貴昭（長崎県）・尾藤伸治（岐阜県）・野口英代（群馬県）・佐々木忍（富山県）各先生がいます。また、トマス杯決勝の第3シングルスで優勝を決めた上田拓馬選手と女子チームシングルスコーチ佐藤翔治さんのお父様は本連盟事務局長の上田敏之さんであり、監事の佐藤正さんです。（ほかにもいらっしゃいましたら私どもの調査不足です。申し訳ありません。）

このように本連盟と深い関係のあるトマス杯・ユーバー杯については『バドミントン100問集』でも取り上げています（第Ⅱ編35問・36問・37問）。その記事をもとに新しい情報を加えてトマス杯・ユーバー杯についてまとめてみました。

これらの大会は優勝杯の寄贈者の名前から付けられました。男子はBWF初代会長のジョージ・トマス卿、女子はイギリスの名プレイヤーH.S.ユーバー夫人です。大会名の英語表記は次のようになります。

THE MEN'S WORLD TEAM BADMINTON CHAMPIONSHIP FOR THE THOMAS CUP
THE LADIES' WORLD TEAM BADMINTON CHAMPIONSHIP FOR THE UBER CUP

日本男子は1954年の第3回から、女子は1965年の第4回から参加しています。女子が初参加で初優勝したことはつとに有名です。この時代、大会は3年ごとに開催され2年間をかけて運営されていました。ですから男子は第1回が1948年から49年にかけて実施され、第2回は1951年からの開催です。女子の第1回は1956年から57年にかけて実施され、第2回は1959年からでした。世界をいくつかのゾーンに分けてトーナメントを行います。男子は5単4複、女子は3単4複を二日間かけて行いました。日時と場所は当事国が話し合っていて決めていました。各ゾーンの勝利国が決まると1箇所に集まってインターゾーンとチャレンジラウンドを行いました。インターゾーンの優勝国がチャレンジラウンドで前回優勝国と対戦するのです。その後、男子の第8回（1970年）、女子の第5回（1972年）から前回優勝国もゾーン優勝国と大会開催国にまじってトーナメントをすることに変わりました。すなわち、チャレンジラウンドがなくなりました。

ゾーンは最初、ヨーロッパ、パンアメリカ、パシフィックの3つでした。男子の第3回（1954年）にパシフィックがアジアに変わり、第5回（1960年）からオーストラレーシアが設けられ4ゾーンになり

ました。その後、BWFの支部でもある次の5つの連盟が主催して予選大会を開いています。
アジア (BAC)、アフリカ (BCF)、アメリカ (BPA)、オセアニア (BO)、ヨーロッパ (BE)

そして、男子の第12回 (1982年)、女子の第9回 (1981年) 大会を最後に対抗戦の形式を男女とも3単2複に変えて、2年ごとに男女一緒に、各ゾーンの予選大会の結果から選ばれた12の国による4組の予選リーグとその各組上位2国による決勝トーナメントを行うように改められました。

ところが、今年 (2014年) の大会出場国の選び方が次のように変わりました。前回優勝国と開催国のほかに、BWFが3月時点での各国のシングルス (上位3人) とダブルス (上位2ペア) の世界ランク得点を合計して国別ランキングを定め、上位14カ国を合わせて16カ国に出場権を与えることになったのです。

また、1チームは5人以上10人以内の選手を登録します。1対抗は3単2複でそれぞれ強い順にオーダーを決めます。レフェリーはこのオーダーを見て同じ選手の試合が続かないように順番を決めます。1対抗中、一人の選手が出場できるのはシングルス1試合とダブルス1試合のみと決められていますから1対抗に最低5人は選手が必要になります。

ちなみに3月27日の世界ランキングでは、日本選手はこうなっていました。

男子シングルス

3位 田児 賢一
12位 百田 賢斗
21位 上田 拓馬

女子シングルス

11位 高橋沙也加
14位 三谷 美菜津
15位 廣瀬 栄理子

男子ダブルス

2位 遠藤 大由・早川 賢一
14位 嘉村 健士・園田 啓悟

4位 松本美佐紀・高橋 礼華
7位 垣岩 令佳・前田 美順

日本が3位以上になった大会は次の通りです。

トマス杯				ユーバー杯			
回	年	開催地	順位	回	年	開催地	順位
7	1966-67	ジャカルタ	3	4	1965-66	ウェリントン	1
				5	1968-69	東京	1
				6	1971-72	東京	1
				7	1974-75	ジャカルタ	2
11	1978-79	ジャカルタ	3	8	1977-78	オークランド	1
				9	1980-81	東京	1
				13	1990	名古屋・東京	3
				20	2004	ジャカルタ	3
26	2010	クアラルンプール	3	23	2010	クアラルンプール	3
27	2012	武漢	3	24	2012	武漢	3
28	2014	ニューデリー	1	25	2014	ニューデリー	2

このように見ると近年の充実ぶりがよく分かります。日本協会の強化策そして本連盟会員の皆様のご指導の賜物です。選手の皆さんの、そして会員の皆さんのますますの活躍を祈ります。